

■動植物遺存体の分析■

遺跡の堆積物には、動物の骨や歯、植物の木部や種実など、遺存体と呼ばれる動植物の一部が含まれていることがあります。

動物遺存体としては、弥生時代の各地の遺跡から、シカやイノシシの骨が多く見つかっています。

それらの骨には、解体した際に付いたと考えられるキズがみられるものもあります。

一般的にシカやイノシシは狩猟によって獲得されたと考えられます。

しかし、弥生時代の遺跡から出土するイノシシの骨を比較、分析した研究によると、一定程度の家畜化された、いわゆるブタの存在が想定されるようです。

植物遺存体には種子や果実類が圧倒的に多く、それらをまとめて種実類と呼ぶこともあります。

種実類の多くは、食料として利用されたと考えられ、その種類や量ともに植物資源の利用を復元するためにきわめて重要です。

例えば、奈良県の藤原京跡のトイレ遺構からはウリ、ナス、ブドウ、アサ、キイチゴ、クワ属、サンショウなどが見つかっています。

またこのうち、ウリ、ナス、アサは栽培植物と考えられています。

堆積物から種実を分離する際には、同程度かそれよりやや大きい魚骨などの魚介類の遺存体が見つかることもあり、それらの利用を推定することもできます。

これら動植物遺存体の、もととなる生き物を知るためには、哺乳類、魚類、植物など、それぞれの専門家が、現生の生き物と比較、分析をする必要があります。

このような分析は、当時の人びとの生物資源の利用を直接知る方法として、今後さらに発展することが期待されます。